

人と「社会」を考える

人間って、どうして「社会」の中で生きているのでしょうか。人間関係を築く上で、人はどんなふるまいをしているのでしょうか。動植物の生態にも、「社会性」が見つかるのでしょうか。そんな、実は身近だと根源的な問いについて考える研究があります。6月は「人間と社会」をキーワードに、文系理系の両方から迫ります。



1時間目 歩く見る聞く

2時間目 手抜き必要論

3時間目 虫も草も私も



「当たり前」を問い直す

■ついに住民の営みを追う

5月末。夏のような厳しい日差しを受けながら、メモやカメラを手にした約20人の学生が、真剣な表情で神社の祭礼とその準備の様子を記録していた。東北学院大（仙台市）文学部の政岡伸洋教授の研究室が、宮城県大崎市で毎年行っているフィールドワーク（現地調査）だ。

ルを立てて毎年一定の成果を出させるような、従来のカリキュラムとは違うんです。今年度に報告書を出す予定だが、特定の研究費が出ていないので成果を「ノルマ」のように考えることもない。「成果が求められる時代に逆行しているようですが、人間の暮らしって1、2年では分からない。分からないことについて考えるには、試行錯誤が必要」と政岡教授は話す。

お供え物の準備の様子を記録していた3年生の平山尚斗さんは「神職によって野菜の盛りつけ方のこだわりが違う。食材も変えているのか、答えはまだ分かりません」。学生たちは準備の手伝いをしながら、地元の人たちの動きを追った。

この質問に、政岡教授は首を振った。「この地域はこう、とそんなに簡単に分かるなんておかしい。形式的にやっても、逆に誤解を与えてしまうだけでは」

午後からは、神社近くの集落を歩いた。東北歴史博物館学芸員の小谷竜介さんのアド

この質問に、政岡教授は首を振った。「この地域はこう、とそんなに簡単に分かるなんておかしい。形式的にやっても、逆に誤解を与えてしまうだけでは」

■イメージ覆す「発見」魅力

調査は3日間。3年生はこの体験をベースに、夏休み前に1週間の現地調査に挑戦する。政岡教授の研究室では、博物館と連携して、この地域での現地調査をもう7年も続けてきた。「スケジュー

民俗学の現地調査って、小中学校でやる「地域学習」に似ていませんか？

「イメージ覆す「発見」魅力」

や社会にどこまで入っていくべきなのか。誰に何を聞けばいいのか。学生には自分たちで考えて動くことが求められる。「ネットが盛んな今の学生は、知識を身につける時に個人で完結し、他者が絡みにくい。だから意図的にコミュニケーションを取らないといけなくしているのです」

研究室内で毎年行う現地調査はその訓練の一環。地元の人

次回は21日に掲載します。



東北学院大の学生が東北歴史博物館の小谷竜介さん（左端）と一緒に、建物や水路の特徴などを見て記録した＝宮城県大崎市

東北地方には縄文文化からつながる習俗が残り、貧しい農村が多い、といったイメージを持たれることが多い。だが関西出身の政岡教授は、現地で調査や研究を続けていく中で「近代以降にがらりと変わっており、ほとんどが間違いだ」と気づいたという。長期間かけて暮らしたの全体像を見るような民俗誌的な研究が、これまであまり行われてこなかったことから、イメージで語られるようになった、というのだ。「実は東北はむちゃくちゃ資源が豊かで、江戸時代以前から物流をベースにグローバルに生きていた商業地だったので

ここが大事 現地でデータ 論理的に組み立て

3年生からのゼミでは、専門用語について調べて発表しつつ、5月と夏休みを中心に、実習で調査に出かけます。民俗学は地域を丸ごと知る学問。分野を問わず、面白いと思ったことは何でも積極的に調べてみる姿勢が大切です。理屈やアカデミックな雰囲気だけにこだわってもあまり意味がありません。今の学生は、他者に対する想像力が弱くなっている。素直なだけに、イメージにひきずられやすい。非効率だけど現地に行って話を聞き、なかなか研究に